

浪 江

津波と原発事故

住民登録者

2011年3月11日 2万1542人

21年2月28日 1万6650人

町内居住者

21年1月31日 1579人

死亡151人 行方不明31人

関連死441人

※浪江町のデータによる



双 葉

住民 今も戻れず

住民登録者(現在の居住者はゼロ)

2011年3月11日 7140人

21年1月31日 5773人

死亡 17人 行方不明4人

関連死155人

※双葉町などのデータによる

いつか帰る日のために

中間貯蔵施設の敷地 所有権は手放さず

夏も涼しくて、ハウレンソウ栽培に適していた。家族や近所の人の手を借りて、3・2畝の敷地にわずか1年で16棟ものビニールハウスを建てた。土壌改良にも取り組んだ。「『甘くてうまい』と褒められた。学校や病院にもまとめて売っていたんだ」。順調だった專業農家としての歩みを、原発事故が奪った。県内外の避難先を転々とする生活が始まった。

国は2011年の暮れ、原発周辺の町村や県に中間貯蔵施設の受け入れを要請した。齊藤さんは「簡単にはあきらめたくねえ」と考えていたが、県は14年、建設を容認する。北茨城市に買った戸建てに環境省の担当者が通ってきた。隣近所に住んでいた人たちは一人、また一人と契約を結び、施設建設のために国が土地を使うことを認めた。齊藤さんも20年3月、応じた。「(拒否したとしても)今は帰れない。避難というよりは、追い出されたんだ」

施設には、県内各地の仮置き場にあった除染廃棄物が次々に運び込まれている。環境省によると、既に約75%が済んでおり、21年度末までにおおむね搬入を完了させる目標だ。「こういう施設ができて『復興が進んでます』なんて言われると腹立つんだ」

国は貯蔵開始後30年以内に施設内の除染廃棄物を県外で最終処分するとしている。齊藤さんが畑や自宅敷地の利用を容認する一方、所有権を手放さなかったのはそのためだ。「いつか帰れるときのために。子どもたちがどう思うか分からないけど。国は約束を守ってほしい」。悔しそうに、そう話した。

自宅の前を通る狭い道路を、放射性物質で汚染された土を積んだトラックがひっきりなしに走る。齊藤宗一さん(71)は1日、避難先の北茨城市から半年ぶりに福島県双葉郡山地区に戻った。「遺書を書いて(トラックに)飛び込んでやろうと思ったこともあるんだ」とつぶやいた。

双葉町は、東京電力福島第1原発事故の影響で唯一、住民が一人も帰還できていない自治体だ。齊藤さん宅がある南東部の原発隣接地は、除染で生じた汚染土などの中間貯蔵施設用地となり、保管施設や受け入れ・分別のための建物が並ぶ。

先祖代々、この土地で農業を営んできた。高校卒業後、米を作りながら農協で働いたが、54歳で早期退職。近隣の畑を買い、專業農家になった。「(地形的に)

【渡部直樹】